庚申講に見る東洋医学的養生法（2）
― 五行の相克関係を用いた鍼灸養生法の提案 ―

松田　昌子
倉敷芸術科学大学生命科学部

（2012年10月1日　受理）

Ⅰ．はじめに

「庚申講」あるいは「庚申待」とは、十干十二支の「庚申」の日にする「講」のひとつである。道教由来の不老不死の法を述べる『抱朴子』（内篇　巻六　微旨）には、人の体内に棲み人が早死にするのを望む「三尸虫」が登場し、庚申講では三尸を封じるために、さまざまな決まり事に基づいた勤行を行う。守庚申は江戸時代に民間に広まったが、現在は一部地域を除き行われていない。前稿では、三尸の駆除方法について、陰陽五行論で分類するために易の理論を用いることを試みた。

易は現代の価値観において、迷信あるいは、フィクションと捉えられることが多いが、中国の歴史では官吏が修める学術・経学の基本とされ、詩・書・礼・春秋とならび五経の一つとされた時代もあった[1)]。一方、陰陽論・五行説は、五経以外にも「管子」、「淮南子」、「漢書」など行政や儀礼について説明する文献に引用されていることが多い。その理由のひとつとして、複雑な業務を整理するために原理原則として用いられていたと考えられている。

中国大陸からわが国へ伝来した後も、我が国の文化に溶け込み、歴史的社会状況や慣習の中で姿を変えながらも展開してきたと思われる。そこで、民間へと流布された後でも、年中行事の中に陰陽五行の法則が応用されていると仮定して、庚申講での三尸について検証した。その結果、三尸を示す六十四卦に「咸䷞」、記号あるいは回数としてたびたび登場する成数[2)]「七」には「火気」が示され、これらの象徴に、三尸を駆除するための類感呪術が含まれていたことが推理された。

続いて本稿では、「庚申」の日に行う意味について検討する。

Ⅱ．庚申講の五行分類

1．暦法と五行説

十干に十二支を組合せた六十干支は、60年や60日など周期を表現する序数として暦法に用いられている。暦数が示す天体や月日の循環は、農務・政務の執行を示す時期の指標として用いられ、平安時代になると日々の吉凶を示す生活指針へと解釈され、主に貴族たちのその日の活動の原点となった[3)]。

（1）干支の組合せ

五行「木火土金水[4]」に、陽と陰に相当する「兄弟」を配当し「甲（木の兄）乙（木の弟）、丙（火の兄）丁（火の弟）、戊（土の兄）己（土の弟）、庚（金の兄）辛（金の弟）、壬（水の兄）癸（水の弟）」の順に符号に分けたのが「十干」である[5]。「十二支」とは、1年12か月の時節の概念を、漢字や音を利用して解釈した声訓法（音義説）を用いて当てはめられた「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」の名称である[6]。十干と十二支を組合せ順に並べた場合、庚申は60通りある干支の中で57番目に相当する。次に干支と陰陽五行の関係を述べる。

十二支に陰陽五行を配当すると、「木（寅・卯）、火（巳・午）、土（丑・辰・未・戌）、金（申・酉）、水（亥・子）[7]」となる。『易経』説卦伝　第三章では、卦を重ねて六十四卦にした理由に、交錯することで孤立した卦に陰陽・剛柔が交ざり、変化・生成の働きを表現することが可能になると述べている[8]。同じく、十二支と交ざり五気の変化の様子を表現した「生・旺（壮）・墓（死）」の三辰（後述）は、五気の性質に対応させて変化を表現している。十二辰[9]は四季の移ろいを表現した「生・旺・墓」だが、土用への配当がないため、五気に対応するという意味においては異なると思われる。

『淮南子』天文訓で述べられる五行と干支の関係を表1に示す[10]。

表1　『淮南子』天文訓における五行と干支の関係

五行（四季）		木（春）		火（夏）		土（土用）				金（秋）		水（冬）	
五　官[11]		田（農事）		司馬（兵事）		都（四方の監察）				理（裁判）		司空（建設）	
十　干		兄（剛）	弟（柔）	兄（剛）	弟（柔）	兄（剛）		弟（柔）		兄（剛）	弟（柔）	兄（剛）	弟（柔）
		甲	乙	丙	丁	戊		己		庚	辛	壬	癸
十二支		陽	陰	陽	陰					陽	陰	陽	陰
		寅	卯	巳	午	丑	辰	未	戌	申	酉	亥	子
三辰[12]	木		旺					墓				生	
	火	生			旺				墓				
	土	墓			生				旺				
	金			生		墓					旺		
	水						墓			生			旺
十二辰		寅	卯	辰	巳	午	未			申	酉	戌	亥	子	丑
十二方[13]		東北	東	東南	南	南西	中央			南西	西	西北	北	東北
十二支		丑寅	卯	辰巳	午	未申				未申	酉	戌亥	子	丑寅

（2）庚申に三尸が活動する理由

1）庚

『五行大義』第二論支干名によると、「庚」は西方に位置し、「更（かわる）」に相当すると述べられている。「更」とは「改めて新しいものに生まれかわる」という意味を持っている。また、庚が示す西方は、物が成就するところと述べられ、物は成就すると成長をやめて、次は殺気のほうが盛んになると解釈される。あるいは、油が冷えて固まるように、物が冷えて固まることを成就すると表現し、西方の性質である金の「体」は「固い、強い、冷たい」で、「性」は「柔らかで自由に形を変える」と定められている。

また、『書経』洪範では「金」は従革であると述べられる。「革」とは「革（あらた）まる」ことを示す。このため、道理が正しく順行すれば、金の「性」のように形を「革める」ことができると解釈されている[14]。

2）申

「申」は「伸（しん）」に相当する。「伸びる、引く、長ずる」から、伸は「衰え、老いる」という意味を持っている。または同じ韻の「身（しん）」を当てはめ、「伸びる身」から長じて「老いて身体が完成する」という意味も示している。『淮南子』によると、申は陰気に傷められて「呻（うめ）く」意味もあると説明されている[15]。

このように「庚」と「申」を合わせると、「庚申」の方角とは「殺気が盛ん」であり、「万物が形を革め」、「老い衰え、呻く」様子を表しているともいえる。

3）庚申に活動する三尸と金気

『淮南子』天文訓では五行の相生・相勝関係を用いて吉凶を定めている。干支の五気が同じ「気」で重なるのを「専」といい、専を以って事に従えば功がある日を「専日」という[16]。暦法では60日の間に専日が八日あるため「八専（はっせん）」と呼ばれている。「暦注・選日[18]」の一つである八専は、もともとは軍事上の忌日だったが、江戸時代に民間で用いられるようになってからは、鍼灸治療を行うには忌む日とされている。鍼灸治療には東洋医学的な考えに基づく「気血の調整」が含まれるため、気が偏在する専日が重なるのを忌避したと想像される。

「庚申」は「金気」の専日である。金気の象徴を用いた行いは、五官では「裁判」が相当する。「裁判」と「功あり」を合わせて、「裁判の功績が上がる[17]」と解釈することも考えられる。また、金気の五官「裁判」には、庚申の日に三尸が告げ口する相手である「司命」との関わりが深い。司命の役割は人の罪の軽重に応じて、命を算（3日）あるいは紀（300日）奪うことである。このため、ある基準に基づき、裁定の裁判を行うという意味にもとれる。つまり庚申の専日における「事に従えば功ある」のは、三尸にとっては、司命が行う裁判「事」であり、「事に従う」のは人の寿命が短くなることと解釈することができる。このことは、三尸にとっては「悦び」となる。そして「悦び」を示す六十四卦には、まさに「兌䷹」が相当すると考えられる[19]。

以上により庚申の日には、三尸を悦ばせない方策として、まずは「金」を封じることが必要となってくると思われる。

（3）三合にみる五行の相生相勝説

1）金の三合による相勝説

『淮南子』天文訓で五気と十二支を交錯させることで、気の変化を表現した三辰は、『五行大義』第四論相生では三合五行説として説明がなされている。生死の変化について関わりの深い「金」について、同じく生死の変化を表現する「金」の三合五行説を下に示す。

金は気を寅に受け、卯に胎し、辰に養われ、巳に生まれ、午に沐浴し、未に冠帯し、申に臨官し、酉で王んに、戌に衰え、亥に病み、子に死し、丑に葬らる[20]。

十二支：	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑
生　死：	受	胎	養	生	沐浴	冠帯	臨官	王	衰	病	死	葬
五　行：	木	木	土	火	火	土	金	金	土	水	水	土
天の数：				二		三		五		七		九

『易経』繫辞上伝では「天の数は一・三・五・七・九[21]」と説明する。奇数を天の数と位置づけ、『淮南子』天文訓に記載される相勝説「五勝は一に生じ、五に壮んに、九に終ふ」に従い、三合「生・王（旺）・墓（葬）」を五行の相勝説に重ねると、次のようになると考えられる。

・五勝は「一」に生じるため、金は「巳で生まれ」、五行の性質は「火」である。

・巳から数えて「五」番目の「五で壮んに」は「酉で王（旺）んに」、性質は「金」である。「火」は「金」に勝つ関係にある。

・巳から数えて「九」番目の「九に終ふ」は「丑で葬らる」、性質は「土」である。

金の三合のうち「生と王（旺）」は相勝の循環「火勝金」となり、高熱が鉄を溶かして鋳造するように、「火」は「金」の形を変える性質を持つということを表している[22]。つまり、金の三合において「金」と相勝関係にある「火」は、金気の専日である「庚申の日」に、「人の寿命を短くする裁判」の功績が上がり、三尸の悦ぶ姿を別のものに変える位置関係にあると考えられる。同様に「生と墓（葬）」は相生の循環「火生土」である。「火」は「生数二」であり、「土」の「生数五」と和合し「成数七」となり「炎上」する[23]。

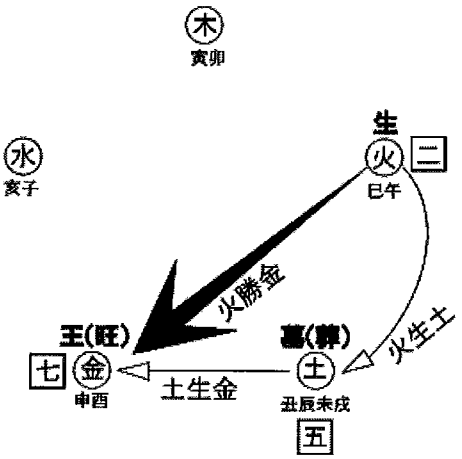

図1　金の三合と相勝関係

相生「土生金」もまた、金を「葬る」ための「炎上」に続く循環をもたらしていることを示す。それゆえ、金の三合「生・王（旺）・墓（葬）」の組合せは、炎上（成数七）とともに「金は火によって葬られる」と解釈することができる。

金の三合における相勝関係を図１に示す。

２）火の三合による相生説

ここで矛盾が生じないように注意が必要なのは、「金」の相生「金生水」である。「金」は水の三合において「水を生じさせる」意味を持ち、そして「水」は相勝「水勝火」によって「火」を消してしまう関係にあるため、「金」を葬るための「火」が「水」により消えるという矛盾が生じてしまう。このため、火の三合を用いて「水」に対する防御策を推理してみる。まずは『五行大義』第四論相生から、火の三合について述べた部分を下に示す。

火は気を亥に受け、子に胎し、丑に養われ、寅に生まれ、卯に沐浴し、辰に冠帯し、巳に臨官し、午で王んに、未に衰え、申に病み、酉に死し、戌に葬らる[24]。

十二支：	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌
生　死：	受	胎	養	生	沐浴	冠帯	臨官	王	衰	病	死	葬
五　行：	水	水	土	木	木	土	火	火	土	金	金	土
天の数：				三				五		七		九

三合のうち「生・王（旺）」は相生「木生火」の関係である。つまり、「木」は火の三合で「火が生じ、旺盛となる」という意味となり、相生「木生火」と同じ意味となることが示された。火の三合における相生関係を図２に示す。

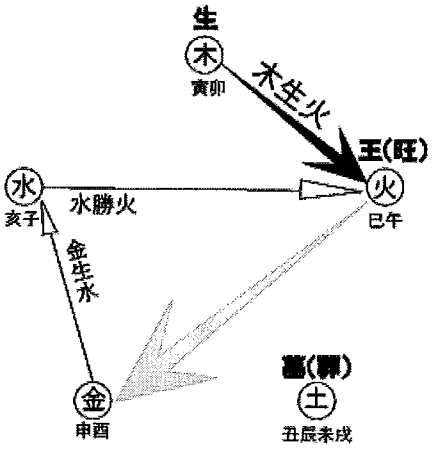

図２　火の三合と相生関係

ここで金気の性質が「燥」であることに注目してみる。庚申とは金気が重なる専日であるが、金気の色が濃くなればより乾燥が強くなる。そして相勝「金勝木」の関係により、木気をさらに乾燥させて「火」を生じさせ易くすることができる。「火」は金の三合でも述べた相勝「火勝金」の関係に戻り、「金」が象徴する「裁判の功績」を上げさせないように抑える関係を作り出すと考えることができる。

次に相生「木生火」の関係を形に表した「青面金剛」について述べる。

３）青面金剛が示す木気

青面金剛は、庚申講で祀られる神像である。『陀羅尼集経』に登場する「伝尸病（肺結

核)」を取り除く秘法「青面金剛呪法」や、「金剛杵(しょう)」を持つ帝釈天、あるいは道教の司命神などと習合され、庚申の神像になったと考えられている[25)]。

青面金剛の「青」は「木」の五行色である。相勝「水勝火」による消火が起こらないように、火の三合により「火」を生じさせる必要があるが、ここで青面金剛の「青」は、相生「木生火」の循環が出来上がるよう「木」を具現化させたものと考えることができる。青面金剛を「木」に喩えた場合、金剛の性質は「金」であるため、次に繰り出される相勝「金勝木」の「金」と「木」は、「金剛」と「青面金剛」とで同じ象徴を指す。つまり、相勝関係は成立せず、循環の繰り出しはここで止まることが推測される。

以上、庚申講の神像に青面金剛が選ばれている理由について検討してみたが、そこには相生「木生火」から相勝「火勝金」を導き出すことによって、三尸の活動を抑え込むという構図が含まれていたと考えられる。

次に説卦伝と洛書で求めた卦である「震」と九宮図の関係について述べる。

2．洛書と庚申

(1) 三尸と青面金剛

河図が天地陰陽の象を数字にしたものであるなら、洛書とは、その後の自然現象を表したものである。

河図分類で三尸の悦ぶ姿を示す「兌」と炎上の意味をもつ「成数七」は、現象や変化を示す洛書をもとにした九宮が示す方位では、「西」を示している。一方、青面金剛に習合された帝釈天の起源は、インド神話に登場するインドラ神であり、本来は雷神とされている。また、『易経』説卦伝　第六章によると「雷」を象徴する八卦は「震☳」であると述べられる[26)]。

六・乾	北・一・坎 壬癸 亥子	八・艮
西・七・兌 庚辛 申酉	五・戊己 丑辰未戌	東・三・震 甲乙 寅卯
二・坤	南・九・離 丙丁 巳午	四・巽

図３　九宮図

天地を移動するといった「陰陽」の性質を持つ三尸と、現象と変化をもたらす性質の青面金剛を九宮図に当てはめたところ、三尸と青面金剛が対極の位置構造となった。

洛書をもとに数字・方位・八卦・干支を配置した九宮図を図３に示す。

(2) 金気と木気に関わる十二支

庚申・西・金気が陰の始まりならば、反対側の甲寅・東・木気は陽の始まりである。寅と申の間を十二支の順で数えるとお互いが七番目に相当し、寅と申は対立する。数字の「七」は「火」が炎上することを表す成数でもある。

また、九宮図で「兌」の反対側に位置するのは「震」である。青面金剛の象徴するものとして「木、雷、震」が考えられることは前に述べた。

金は「万物の生長をやめ」、木は「万物を生む」[27]。これらの性質を三尸と青面金剛の関係に当てはめると、三尸は人の寿命を短くすることを望み、青面金剛は命を生み出す象徴と考えられる。金気と木気は五行の相勝関係にあり、陰陽の関係においても対立していると解釈することができる。

Ⅲ. 結　論

1．まとめ

庚申講の事象について陰陽五行で分類してきたが、年中行事についてはその行為を行うことに意義があり、細かい事物を検証することに意味などないという見方もある。しかし、何故そのものが祭事に必要なのかに目を向け、そこに隠された法則を見出すことができたなら、行事を行う行為に対する理解がいっそう深まるのではないかと考える。今回はそのような観点から検証した結果、一見でたらめに配属されたかのように見える事物が、解釈を広げれば実は陰陽五行の原理原則に基づき、具象化された喩えとなっていたことが示唆された。

（1）陰陽論に起因する「火」

庚申講でたびたび登場する「七」は「炎上」という意味の成数で、火の「生数二」に土の「生数五」が加わり、初めて「炎上」という意味を持つ。これは陰陽論に数字を当てはめた考えに基づいている。そして庚申講においては三尸を駆除する記号であると考えられる。「庚申の七色の菓子」に代表される「七」の中には、三尸と三尸の企みを「炎上」させる「火」が隠されていると思われる。

（2）三合五行説に起因する「木」

三尸は普段は人の体内に潜んでいるが、庚申の日には体外に出てしまうと伝えられている。三尸の普段の姿から変化・生成させないための方法として、防御のための金の三合を用いると、消火の意味を持つ「水」が生まれてしまう。三尸を抑える火を消さないために、火の三合を用いて「木」から「火」を生じさせるものの必要が生じた。「木」の色は「青」であるため、「青面金剛」がその象徴に最も相応しい。

（3）「木」と「金」の対立

現象を表す洛書を基にした九宮図では、木気と金気は東西の対極に位置する。東は太陽が昇り始める方向で、万物を生み四季では春を表す。対する西は太陽が沈む方向で、万物の成長が終わり四季では秋を表している。木気と金気は「青面金剛」と「庚申の日の三尸」を象徴すると考えられるが、九宮図においても、二つの気が対立する図式が示された。

2．鍼灸養生法への活用

庚申講の諸相に対応する法則を鍼灸に応用することは、あたかも迷信的効果を現代の医療に期待するようで、荒唐無稽に思われるに違いない。しかし、疾病の治療あるいは予防

に、情緒や感情を排除した科学的手段だけが有効であるとは限らない。科学的に確立された治療法でさえ、年齢、職業、性別、家族歴、嗜好など、個々の異なる社会的背景や文化的環境のもとでは、効果に差が生じるなど不確定な要素があるのは否めない。

そこでこのような方法は心理的効果を狙った養生法の一つとして、全人的医療（ホリスティック医療）に用いるのが望ましいと考える。鍼灸治療院の来院者の中には、鍼灸に癒しを求めている場合が少なくない[28]。健康について漠然と持つ不安感に対する精神的ケアが求められる場合に、共感性に働きかける援助的な方法として活用できると考える。鍼灸刺激の身体に及ぼす効果は数多く実証されており、物理的な鍼の刺激は、身体に気血循環の促進あるいは抑制を目的として、選穴や手技に変化を与えて施術される。それは、薬効のない偽薬を指すプラセボ効果や、でたらめに行う気休めとは趣旨がまったく異なる。また、陰陽五行論を診断や治療に用いる場合は、共通する理論体系の知識が基本にあるため、カリスマ性のような行動特性をまったく必要とせず、誰でも活用することができる養生法として、十分役に立つ考え方であると思われる。

次に示す方法は、庚申講を鍼灸養生法に活用するための一つの参考例である。

（1）「木生火」、「火克金」の相生相克関係[29]を用いた灸療法

「金」の象徴である庚申や三尸を抑えるためには、相克「火克金」の法則を用いて、火を使用し数字の「七」を表現できる方法として、灸が最も望ましいと考える。

1）主要経絡

「木」に対応している足の厥陰肝経、足の少陽胆経、「金」に対応している手の太陰肺経、手の陽明大腸経が考えられる。

2）方　法

知熱灸あるいは温熱灸を「七壮」据えることとして、相生「木生火」には補法、相克「火克金」には瀉法を用いるなどの手技による使い分けも必要である。

3）使用経穴

足の厥陰肝経の井木穴「大敦」・原穴「太衝」、足の少陽胆経の兪木穴「足臨泣」・原穴「丘墟」、あるいは手の太陰肺経の経金穴「経渠」、手の陽明大腸経の井金穴「商陽」などが考えられる。

（2）三合五行説を用いた鍼療法

黄帝内経『霊枢』（順気一日分為四時篇）では五変に基づいた刺法として、一日を十二刻に配当し五兪穴を用いる方法が述べられている[30]。そこで「金」の象徴である庚申や三尸を鍼に見立て、三合五行説から「墓（葬）」を用いる方法が考えられる。三合五行説では、「王（旺）」から「墓（葬）」に至る間に「衰・病・死」があげられている。「金」の「衰」は同じく「土」で問題ないが、「病・死」には「水」が配当する。この場合、「水」に対応する足の少陰腎経、足の太陽膀胱経は相克「水克火」を想起させるため、適さない。

1）主要経絡

「金」に対応している手の太陰肺経、手の陽明大腸経、あるいは補強のために相克「火克金」を組合せる場合には、「火」に対応している手の少陰心経、手の太陽小腸経が考えられる。

2）方　法

「生・王（旺）・墓（葬）」の中でも「墓（葬）」の性質を持つ経穴の場所に置鍼し「金封じ」とする。金の三合で「墓（葬）」は「土」が相当する。また、補強のためには、火の三合から「王（旺）」を使用することも考えられる。抜鍼後は後揉捻を施し、三尸を体外に出さないよう鍼孔を閉じる。

3）使用経穴

手の太陰肺経の兪土穴「太淵」、手の陽明大腸経の合土穴「曲池」、あるいは手の少陰心経の栄火穴「少府」、手の太陽小腸経の経火穴「陽谷」などが考えられる。

以上、60日毎に巡る庚申の日を、「徹夜して決して眠らない」という方法を用いた地域付き合いの意味も含まれる「講」から、健康づくりの「養生の灸」、「養生の鍼」に転用して「病気と健康についての再認識を促す日」に活用するべく、提案とさせて頂く。

（おわり）

注

1）赤塚忠『中国古典文学大系　書経・易経（抄）』平凡社、1994年、p597-611。

2）なお物を生ずる「生数」と物を成す「成数」については、ともに「漢音」で「せいすう」と発音し、同音異字となるため聞き分けが難しい。『五行大義』では「成数」についての説明で「禮記月令、是時候之書。所貴成就事業。故言成數。」と記載される。通釈で「事を成し就げる」とされている「成就」は、書き下し文では、仏教語で「じょうじゅ」とする慣用音が散見される。後に続く「故言成數。」の「成」の発音は「せい」としているが、本稿は韻を分け「生」は「せい」、「成」は「じょう」と読むことで統一する。小川環樹、西田太一郎、赤塚忠『新字源』角川書店、2000年、p393、665、日本語国際センター『新表記』凡人社、2003年、p155-156、中村璋八『五行大義　上』明治書院、2008年、p97-98。

3）なお我が国に暦法が伝来したのは欽明天皇14年（553）が始めといわれている。暦の会『暦の百科事典』新人物往来社、1986年、p183。

4）五行の序列は、『書経』洪範の五材説によって説明される「君主がそなえるべき徳の基本」となる「水火木金土」より始まる。その後、『管子』四時篇で「土」を中央に置き、「木金火水」を四方・四季に配した「木火土金水」の序列が成立した。陰陽五行説は、相勝相生説が説かれるようになってから試行錯誤を経て、後漢代以後に現在とほぼ同様の配列が主流となった。島邦男「五行思想の成立と展開」（『経絡医療』東洋鍼灸医学雑誌　1号、1977年）

5）暦の会、3）前掲書『暦の百科事典』p190-191。

6）戸川芳郎、朝倉照平『中国古典文学大系　淮南子・説苑（抄）』平凡社、1994年、p46。

7）五行の土とは、四時の間に生じた18日間の「土用」を示す。対応する十二支は表1から「木・未、火・戌、金・丑、水・辰」となり、土気の土を除き、三合の「墓」はすべて土となる。「墓」は終わりと始まりを表しているため、土用には季節が終わった後の18日間のことを示すと同時に、次の季節の始まりも含まれている。楠山春樹『新釈漢文大系　淮南子』明治書院、1990年、p187-189。

8） 今井宇三郎、堀池信夫、間嶋潤一『新釈漢文大系 易経 下』明治書院、2008年、p1719-1724。
9） 十二辰とは1年を四分割し、春夏秋冬（木火金水）の循環に配当したのをいう。
10） 楠山、7）前掲書『淮南子』p137-146。
11） 五官とは天上の五官をいう。
12） 木生于亥、壮于卯、死于未。三辰皆木也。火生于寅、壮于午、死于戌。三辰皆火也。土生于午、壮于戌、死于寅。三辰皆土也。金生于巳、壮于酉、死于丑。三辰皆金也。水生于申、壮于子、死于辰。三辰皆水也。故五勝生一、壮五、終九。楠山、7）前掲書『淮南子』p181-184
13） 十二方とは四（し）仲（ちゅう）（四方位）と四（し）鉤（こう）（四隅）に十二支を配当したのをいう。月と方角とを示す場合、十二支を用いるのは当時の通例であった。楠山、7）前掲書『淮南子』p144-146、150-153。
14） 中村、2）前掲書『五行大義 上』p62-63、70-71、77-78。
15） 中村、2）前掲書『五行大義 上』p64-66、216-217。
16） 以専従事而有功。楠山、7）前掲書『淮南子』p187-189。
17） 戸川、朝倉、6）前掲書『淮南子・説苑（抄）』p38。
18） 暦注とは、暦に記載される「注」のことである。選日とは、暦注の中で五節句（端午や七夕など）、雑節（節分や彼岸など）、年中行事などに含まれないものの総称で、多くは吉凶を判断するのに用いられる。なお同気で重なる八専は57番目「庚申」の他に、49番目「壬子」、51番目「甲寅」、52番目「乙卯」、54番目「丁巳」、56番目「己未」、58番目「辛酉」、60番目「癸亥」がある。暦の会、3）前掲書『暦の百科事典』p325-335。
19） 三尸の陰陽五行分類と関連する易の分類については、拙稿「庚申講にみる東洋医学的養生法（1）」（『倉敷芸術科学大学紀要』倉敷芸術科学大学 17号、2012年）参照。
20） 金受氣於寅、胎於卯、養於辰、生於巳、沐浴於午、冠帯於未、臨官於申、王於酉、衰於戌、病於亥、死於子、葬於丑。中村、2）前掲書『五行大義 上』p156-159。
21） 天一、地二、天三、地四、天五、地六、天七、地八、天九、地十。8）前掲書『易経 下』p1467。
22） 金非火、不革其形。故金在火位中生。中村、2）前掲書『五行大義 上』p162-163。
23） 庚申に関係が深い「七」については、19）前掲拙稿「庚申講にみる東洋医学的養生法（1）」ですでに論じているのを参照。
24） 火受氣於亥、胎於子、養於丑、生於寅、沐浴於卯、冠帯於辰、臨官於巳、王於午、衰於未、病於申、死於酉、葬於戌。中村、2）前掲書『五行大義 上』p156-159。
25） 川口謙二『日本神祇由来事典』1994年、p328-329、総合仏教大辞典編集委員会『総合仏教大辞典』法蔵館1988年、p433、926。
26） 今井、堀池、間嶋、8）前掲書『易経 下』p1743-1747。
27） 中村、2）前掲書『五行大義 上』p54、57。
28） 根岸とも子、箕輪正博「鍼灸治療院患者の利用継続に関連する要因の分析」（『社会鍼灸学研究』社会鍼灸学研究会 7号、2012年）
29） なお鍼灸療法について述べる場合は「相勝」は「相克（そうこく）」と表記する。東洋療法学校協会『東洋医学概論』医道の日本、2011年、p16。
30） 石田秀美、白杉悦雄『黄帝内経霊枢 下』東洋学術出版、2001年、p32-42。

A Study of Oriental Medicine Health Care of "Kohshin-Koh" (2) — Proposal for Acupuncture and Moxibustion Health Care that Employs an Overcoming or a Generating Cycle of the Five Elements —

Masako MATSUDA

College of Arts,
Kurashiki University of science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received October 1, 2012)

In my previous paper, I attempted to classify the three worms (sanshi) using I ching. This paper discusses the 57th day of the sexagenary cycle (kohshin). It has been confirmed that the 57th day in the sexagenary cycle of metal is the most inauspicious day of the eight inauspicious days (hassen: 49th, 51st, 52nd, 54th, 56th, 57th, 58th and 60th) in the Japanese old calendar. In particular, it is believed that on these eight days one's qi is unbalanced.

Among the five ministers, metal qi symbolizes a trial with a judge (shimei), to whom the three worms report one's wrongdoings. As metal qi is unbalanced, this is the day when shimei's trial, requested by the three worms, is most likely to occur. Thus, on the 57th day of the sexagenary cycle, people must countermeasure any advantages gained by the three worms.

This method is based on the theory of triad and five elements, in which three specific Chinese zodiac signs unite. It uses the "life, vitality, and tomb" of the qualities of metal and fire to create the overcoming cycle (sōkoku) seen in "fire melts metal" and the general cycle (sōshō) toward "wood generates fire." "Blue," which symbolizes Shomen Kongo (Blue-faced Vajra Mingwang), is the principal object of worship on the 57th day of the sexagenary cycle. It can be considered that an embodiment of "wood" gives rise to the cycle of sōshō.